

■ **蜷川式胤** 維新期の官僚，好古家。正倉院宝物の紹介，博物館の開設に尽力し，日本の陶器を海外に紹介した。

にながわのりたね

滑稽+人情本 1835 =

京都で蜷川子賢の長男に生まれる。幼名与三郎，また親胤。

蜷川家の祖先は丹波船井郡高屋村の代官であったが，加勢した明智光秀の敗亡のため，京都に移って東寺の寺侍となり，代々，境内東北隅の屋敷に住んでいた。

大塩平八郎乱1837 = 2歳：

天保改革終・1844 = 9歳：

阿部正弘首座1845 = 10歳：

幼時より父に学んで，考古学や古美術を研究する一方，弘法大師の祟心経を手習して筆達者になり，

ペリー来航・1853 = 18歳：

洋学を学び洋画を描くなど，京都では際立って進歩的で，見識も高く，

五ヶ国条約・1858 = 23歳：早くも，正倉院の宝物模写図に奥書を残している。

桜田門外変・1860 = 25歳：

生麦事件・・1862 = 27歳：

正倉院の御物は，江戸時代の末期まで，修理に際して庫の外に置かれていても関心を引かず，調査も行われず，式胤誕生の2年前の開封に際し，穂井田忠友が，娘を奈良奉行の妾に差し出すまでして調査員に加えてもらい，主として古文書の整理に従事して，はじめて，正倉院についての著作を刊行，「大日本古文書」の基礎になった。その後，再び開封されずにいたが，

大政奉還・・1867 = 32歳：パリで開かれた万国博覧会に幕府が参加，随員の一人田中芳男が動物園や博物館を見学，

明治維新・・1868 = 33歳：維新になるや，

戊辰戦争終・1869 = 34歳：***東京丸の内に家を与えられ，太政官制度取調御用掛となり，権少史から少史へ進み，関西へ調査の旅行，民法編纂の会議で，フランス民法典の翻訳に協同し，海軍の軍艦旗と短剣，陸海軍の軍服の制定に関係するなど，多方面に活躍。**

廃藩置県・・1871 = 36歳：少史が廃官となり，外務省の外務大録として編輯課御用書類下調掛になると，太政官に許可を願って，写真師横山松三郎・洋画家高橋由一と「旧江戸城写真帖」を作り(重要文化財になっている)，常設の博物館を上野と芝に開設するよう，町田久成らと建議，九段の招魂社(靖国神社)境内で，祭礼を利用して，田中芳男の持ち帰った博物学の標本や理学機械，自ら蒐集してきた古代の美術品を，文部省主催で公開陳列，日本の展覧会事業の嚆矢となり，京都博覧会の開催に尽力，岩倉使節団のための，書類の準備に携わっている。

学問のすすめ1872 = 37歳：***文部省博物局御用兼務を兼務，太政官前年布告の「古器旧物保存方」に基づき，文化財の保護と知識の普及に尽力。町田久成に従い，洋画家高橋由一・写真家横山松三郎らと，伊勢・名古屋・奈良・京都の古社寺や華族の宝物を調査して，日記「明治五年社寺宝物調査記」一冊を著し，また，翌年のウィーン万国博覧会の準備として，町田久成，当時オーストリア=ハンガリー帝国公使館勤めのハインリヒ・フォン・シーボルトらと，湯島聖堂大成殿で，文部省博物局主催としては初の博覧会を開き，博物館と名付けられ，その始まりとされるとともに，この機を利用，自ら主唱して，正倉院開封の許可を得，"王申検査"と呼ばれる調査を行い膨大な宝物図集(重要文化財になっている)の一部と，日記「奈良の筋道」三冊を残した。正倉院が近代文化のなかに位置づけられた極めて重要なものでありながら，公的には発表されないままであった。**

明治6年政変 1873 = 38歳：

初の民間工場1875 = 40歳：内務省博物館掛になる。東大寺大仏殿を利用して，奈良博覧会を開くにあたり，正倉院へ出張して開封，宝物を陳列した。

三つの反乱・1876 = 41歳：この年も，正倉院を開封して宝物陳列したが，大久保利通が，各地の新工藝製作の参考にさせようと，三条実美に頼んで，染織品を各府県の博物館に頒布してしまい，その後大部分行方不明になってしまうことになった。道三町の自宅には多くの陶器を所蔵し，屋敷の一部に，石版印刷の出版所{楽古舎}を設け，川端玉章，高橋由一らを雇い，「観古図説 陶器之部」の第1～5冊を，3年かけて刊行中，

西南戦争・・1877 = 42歳：この年東大寺を訪れた明治天皇は，正倉院で蘭奢待を切らせ，2年後にも再び切らせ，香を楽しんでいるが，本来，正倉院の宝物を私有することは，天皇といえどもできなかったのである。病を理由に退職。{楽古舎}では，同好を集めて古陶器の"当てっこ"もした。H・F・シーボルトやE・S・モースも訪れた。

大久保暗殺・1878 = 43歳：この年も，正倉院を開封して宝物陳列。「観古図説 城郭之部」1巻。

沖縄県編入・1879 = 44歳：この年から，モースと緊く交わって日本の陶器の鑑識について教え，1000点以上と推測される古陶器を贈り，あるいは共に町に出て集めた。今日ボストン美術館が所蔵する「モース日本陶器コレクション」の発祥である。またシーボルトの帰国前に自著を含む少なくとも5冊の書物を贈り，これらは現在ケンブリッジ大学図書館に所蔵されている。「観古図説 陶器之部」第6冊，

・・・・・・1880 = 45歳：この年も，正倉院を開封して宝物陳列したが，宣伝不足や，交通機関の未発達もあって，今まで同様。参観者は少なかった。第7冊を刊行した。石版刷りに彩色を施した画集で，仏文あるいは英文の解説も付けられ，ほとんどが輸出され，海外コレクターの指標になった。

明治14年政変1881 = 46歳：正倉院宝物は農商務省の主管，文書は内務省，宝庫の開閉は宮内省の所管になり，2年後からは，毎年一回，定期的に開封するようになる。多数の正倉院宝物拓本も{楽古舎}で印刷出版するつもりであったが，

新体詩抄・・1882 = 47歳：急逝した。谷中の葬儀に参列したモースは，死因をコレラと記している。

新政府に採用されて以来，没するまでの13年間の「蜷川式胤日記」が遺され，1902年，姉の辰子が，「観古図説陶器瓦之部」「同瓦之部」を刊行したが，「徴古図説」「好古図説」は未刊に終わる。正倉院の所蔵品の散逸に式胤が関わるとの推論が行われている。嗣子の蜷川第一は美術史家として活動。叔父である式胤の追慕録をまとめた。また野々村仁清の研究家として仁和寺門前御用窯の発掘も手がけた。1886年には，国家のものであった正倉院は宮内省専管になってしまうが，民衆への開放に努めた町田，蜷川らの方針は裏切られ，特権階級の玩弄物になってしまうのである。